巻頭言

「先輩の仕種を真似て成長する」

近畿大学医学部共同研究施設長
近畿大学医学部薬理学教授
東　野　英　明

医学部における学生教育の目標は，体調を崩して困っておられる御病人を救える医師や，新しい医学を創造できる研究者や，健康問題を指導できる教育者を育てることにある．では，どのような方法でそれを行うと目的が達せられるかを定年近くまで生きてきた自分自身の過程を振り返ってみると，凡人であれば先人や先輩の思考や行動を「真似する」ことが確実で，間違いが無く，早道であろうと思えた．この世の中どの領域でもそうであるが，特に医学は自然科学であり，膨大な経験の集積技術であり，世の中の最高の倫理であるからである．

「真似する」については以下の俊才の格言や言葉があるが，人が大成するには「真似する」を勧めて肯定するものが多い．例えば，「まねも主体性のうち」，「最初から個性を出そうなんて生意気なことは考えちゃだめ．人まねもできないで，なにが個性か．まねるって，技術がいる（藤村紫雲）」，「子供が年長者のまねをし損なったことはない（ジェームス・W・ヤング）」は真似の重要性を，また，真似だけでは駄目で創造をもと説くのは，「プロセスは「人マネ」でも，結果が新しいものであれば，それは立派な「創造」なのだ（小泉十三）」，「偉人のやり方をそのまま真似るというのではなく，それにヒントを得て自分の持ち味に合わせたあり方を生み出さねばならない（松下幸之助）」などである．一方，真似は良く無いと説くのは，「猿真似」，「鵜のまねする烏水に溺れる」，「楽をしたければ人真似をするのも自由だが，そうなると企業は転落と崩壊の道をたどり始める．人真似をするな（本田宗一郎）」などがあるが，これも真似によって作られた完成的人間がそれに留まらずにそれ以上の能力を発揮することを勧めた言葉である．

で，これらを背景にして大学時代以降の私の人真似人生を紹介したい．大学在学中には，「科学は因果関係を明らかにすること」と諭した生理学のＳ教授からは結果があればその原因を探り出そうと工夫することを，生化学のＮ教授が古武弥四郎先生の言葉「凡人は働かねばならぬ，働くとは天然に親しむことである，斯うして初めて天然が見えるようになる（一部）」を座右の銘とされていたことから「苦労を厭わず自然と対話する」を意識し，産婦人科のＴ教授は真剣に

女性患者の心身両面の問題点を考えて対処されていたことから患者中心の医療態度を，内科学のＩ教授からは診療や研究両面で隅々まで行き届いた思考と行動と根回しの方法を学んだ．研修病院では，肝疾患専門医のM部長から経験に基づいて病因を解明する術を，血液疾患専門医のＫ部長からは癌化学療法を行う上での理論的背景を，若手のＦ先生からは対人，対管理者応対法と生きて行く上での便法を，研修後に勤務した病院のＴ，Ｋ，M先生からはそれぞれ異なってはいるが多様な患者との付き合い方と治療の実際を，大学病院のＴやＹ先生からは病気を科学的に解析して新治療法を探る意欲と方法を学ぶことができた．近畿大学に奉職してからも先輩の先生方から多くの影響を受けた．海軍士官学校出身の二人のM教授からは規律と時間厳守の習慣を，３人のＳ教授からは教育や研究方法の実際と大学人の在り方を学んだ．また，大学時代より空手道の修練を続けているが，何人にも媚びずに自己研鑽に励むM師範から真の人間性を学ぶことができた．これまで，多くの教室員，大学院生，学生諸君等と会してきたが，自分の後輩であっても個々それぞれに学ぶ点があり，自己を向上させるのに役だっている．

未だ自己主体性の確立が充分では無いので，今後は後輩を指導しつつ，教育者，研究者が目指さねばならない目標に向かって，いくらかでも後輩に真似していただける自己を作っていきたい．